AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム (2017) 第17巻:79-80.

第86回日本衛生学会学術総会開催報告

吉田 貴彦

旭川医科大学研究フォーラム 17　：79 ～ 80，2016

学会の動向

第 86 回日本衛生学会学術総会　開催報告

吉　田　貴　彦*

20 年ぶりの北海道での開催となった第 86 回日本衛生学会学術総会が、2016 年 5 月 11 日から 13 日まで、旭川市民文化会館を会場として滞りなく執り行うことが出来ましたことをここにご報告いたします。

日本衛生学会は、日本医学会の一部会として明治35年（1902 年）「衛生学・細菌学・伝染病学」との連合体として発足し、昭和 4 年（1929 年）の日本聯合衛生学会（昭和 24 年（1949 年）に日本衛生学会に改称）を第 1 回の学術総会として綿々と歴史を重ねている学術集会です。日本衛生学会の扱う範囲は、人間･環境･健康の包括的理解を目指す、社会医学の分野です。DNA や細胞から人の身体全体までの生命現象や健康について学術的に究明しつつ、人間社会や環境に存在する諸因子との関係など広く研究対象としています。医学関連諸分野の専門性が高度に細分化され、膨大な知識が集積される現代にあって、衛生学が「個々の人の生命の本質を総体としてとらえ生命･健康を守る（衛る）ために、社会との関連の在り方」を学術的に取り組む統合学としての役割を担っている事は極めて重要となっています。

21 世紀は「環境の世紀」と呼ばれて始まりました。産業革命から徐々に進みはじめた地球温暖化に由来すると考えられる異常気象は、スーパー台風や爆弾低気圧など超巨大な低気圧を生み出し、日本周辺のみならず世界各地で年間を通じて豪雨、暴風、洪水や高潮の被害をもたらしています。また火山噴火、地震や津波も各地で大きな被害をもたらしています。さらに人為的な要素が大きくかかわる環境問題も多発し、人間の目先の豊かさや利便性を追求した過剰開発がもたらす自然環境の破壊が野生生物の生存ばかりか人間の健康をも脅かし、日本が舞台として起こった原発事故による放射能汚染など枚挙にいとまがありません。私たちは環境との相互関係を持ちながら生活せねばなりませんから、世界で協調して環境問題に対処しようとの機運が高まり、新しい 21 世紀を期に環境保全に努めようとの期待を込めて世界は「環境の世紀」と呼んだのでした。それにもかかわらず、世界経済の不透明感が蔓延し、暴力で勢力を拡大しようとする集団が台頭するなど世界各地で戦争や紛争、テロ事件が絶えず、世界全体が不安定な状況に陥り、せっかく環境に向けられ始めた眼が逸れてしまう事が危惧され、今や環境問題は危機的な状況にあるといっても良いでしょう。地球的な環境問題の解決は、もはや人類の英知を結集しても手に余る課題のように感じられてなりません。

今回の第 86 回日本衛生学会学術総会においては、「生命（いのち）を衛（まも）る自然との共生」を学会テーマに掲げ、自然や環境と人間の活動との相互影響、そして共生の在り方に関連する講演やシンポジウムを企画しました。特に特別講演とメインシンポジウムとシンポジウムの幾つかを市民公開講座にも位置付け多くの一般の方々にも理解を深めていただく機会としました。特別講演は地元旭川を代表する旭山動物園の園長である坂東元氏による「共に生きる未来のために～野生生物と共生する人間の責任～」として、動物園が果たすべき役割を紹介していただくとともに、私達人間の活動が野生動物を圧迫する事を自覚しつつ責任を持った対応が必要であることを学びました。海外招聘講演は、中国遼寧省瀋陽市の中国医科大学教授であり公共衛生学院院長の皮静波先生に「Environ-mental Health in China：Challenge and Opportunity」のテーマのもと中国の環境

*旭川医科大学病院　健康科学講座

汚染問題と健康影響の課題について講演していただきました。教育講演は、本学医学科 21 期の同窓生である中谷祐貴子先生にお願いしました。中谷先生は、2015 年に厚生労働省から WHO 本部への 2 年間の派遣から戻られ、健康局結核感染症課新型インフルエンザ対策推進室長・エイズ対策推進室長（現在、保険局医療課医療技術評価推進室長）をされています。中谷先生は WHO での任期終盤に、西アフリカでのエボラ出血熱の流行を受けて流行地域での感染制御に必須かつ有効な資機材等の一覧と品質基準の作成等の重要な仕事をされました。そこで、熱帯地域を中心とした発展途上国における過剰な森林の開発にともなう人間活動の範囲の広がりが感染拡大の一原因ともなる新興感染症などに関連して、「新興・再興感染症対策の最近の動向」について講演していただきました。メインシンポジウム「自然とともに生きる暮らし」では、私たちの生活に密着した自然や環境について考える機会として企画しました。私達の住む日本列島は環太平洋火山帯の上に位置する事から温泉や富士山に代表される風光明媚な地形に富み、四方を海に囲まれた南北に長い列島であることで温帯から寒帯気候までのメリハリのある四季など、私たちは古来より癒しを受け季節を愛でる生活を楽しんできました。その一方で、多くの災害を経験してきたことも事実です。今回は、北海道に縁のある 4 名の方々から、日本の自然から受けている恩恵の一方での自然災害の存在、自然エネルギーの可能性についての経済学な面からの評価、風力エネルギー発電を実用化している地元企業の立場からの現状と課題、自然に負担をかけない私たちの生活・政策などについて講演していただき総合的な討論を行いました。この他、企画公演・シンポジウム・自由集会 20、一般演題 219 題と盛りだくさんの学会となりました。参加者総数も 570 名ほどと例年とほぼ変わらない規模の学会となりました。当日学会運営は、「カムイ大雪バリアフリーツアーセンター」の障がいのある方々を中心とした皆様に委託いたしました。ここにも共生のキーワードがあり、障がいが有っても無くても、赤ちゃんからお年寄りまで、誰にも優しい旭川を作る取り組みの新しい展開につながればと願っています。

本学会の運営に御協力いただいた皆様、また御参加いただきました皆様に、厚く御礼申し上げ、学会の開催報告とさせていただきます。